

氏名：多田聡子

所属：地域教育文化学部地域教育文化学科異文化交流コース 3年

派遣先：延辺大学（中国）

派遣期間：2015年8月13日～9月12日（13日間）

<日本語教室での指導内容>

今回私が渡航した期間は学期始まりの9月で、タイミング悪く、1年生は始め1週間軍事訓練があったためその間授業を行うことができなかった。本格的な授業開始は2週目からとなった。さらに私たちの渡航から、「山形大学日本語教室」を週2回開くこととなった。以下は担当した授業の概要である。

●日本語学科の授業

- ・1コマ90分
- ・日本語作文授業（高校から6年間勉強している大学2年生）
- ・全永男先生の授業（日本語会話、大学から日本語を勉強する1年生）のTA×2回
- ・鄭雅英先生（立命館大学）の授業（日本語会話、大学から日本語を勉強する1年生）のTA
- ・日本語会話授業（高校から6年間学んでいる大学1年生、2年生）×1回ずつ

●山形大学日本語教室

- ・土曜日、水曜日に開講。今回私は2回担当した。
- ・1コマおよそ2時間
- ・対象者は日本語に興味を持つ、日本語学科ではない他学部の学生。
- ・学生は三年生がほとんど

私は日本語学科の授業と日本語教室、2種類の授業を担当したため、日本語を学ぶ学生とそうではない学生の二種類の学生を見ることができた。初仕事は日本語学科の授業で、同時期に渡航した3人で取り掛かったのだが、勝手に分からずとにかく苦戦した。日本語学科ではないこととかつ三年生の参加学生が多いことから、反応が良くなく想像と大きく違っていたこともダメージが大きかった。初回はこのように苦い思い出になってしまったため、二回目はこれを踏まえてpptを準備し、段取りの確認をしっかり行った。pptは山形について、山形大学、山形の気候、山形の伝統、山形の食べ物の紹介とアニメーションやウォシュレットトイレ、折り紙の紹介を織り交ぜて内容を充実させた。そのかいあってか、最後に書いてもらった感想に多くの「楽しかった」と声をもらうことができた。（日本語で文を書くことはできないため中国語か英語での記入。しかし延辺大学の学生は英語が得意ではないため、中国語がほとんどだった）私は折り紙を持参していったため、折り紙の紹

介の際みんなに鶴を折ってもらった。写真好きな中国の学生が完成した鶴を撮ったり、「折り紙の体験ができてとても楽しかった」などと感想をもらったりと、ねらい以上の反応を見ることができ個人的に一番良い収穫だったと思う。

日本語学科の授業は様々なクラスの一年生と二年生を担当したが、やはり軍事訓練終わりの一年生はとてもキラキラしていてまぶしかった。こちらの問いかけや提案にも素直に答えてくれ、一つ一つに反応を返してくれるため他の授業に比べて断然にやりやすかった。二年生の授業も、反応は劣るもののみな高校から日本語を学んでいるため、想像したとおりの日本語ができる中国の学生ではあった。日本語学科向けの授業は山形の紹介を入れつつそれぞれ会話、作文の授業である趣旨に合わせ、早口言葉を伝言ゲーム式で教えたり、夏休みの思い出や将来の夢を作文してもらい発表させたりした。

<日本語教室以外での現地での交流活動>

前回派遣された学生と同じように、私たちにも1人1人チューターがつけられた。2日目に対面し、学食や校内を案内してもらった。しかしそれ以降は、滞在していた寮や学校施設にはWi-Fiが無く、連絡を取るのに苦労した。時間が合ったときは延辺名物である羊串、包飯（中国式手巻き寿司）、マッコリなどの美味しいお店に連れて行ってもらった。また休日には、私たちも前例にもれず北朝鮮の国境地域・図們と延吉市の観光地・帽子山へ行った。こちらは以前山形大学に留学していた学生に案内をお願いした。国境の図們江という川付近は彫刻公園があり、ピクニックを楽しむ人がいるのどかな雰囲気も感じられた。が、タクシーをチャーターして川沿いの部分を周ってみると、北朝鮮側にやはり古堡（脱北を試みる者を射殺するための隠れ小屋のようなもの）が北朝鮮側の川沿いに等間隔で設置されていた。テレビで見るとような北朝鮮の実態が感じられ、その日図們は真夏のような日照りだったにもかかわらず、背筋がずっと寒くなるようだった。残念ながら国民の休日に訪れたため、国境線まで橋を渡ることはできなかったが存分に独特の雰囲気を感じることができた。



日本語学科の全先生、国際事務の黄先生、さらに日本語が達者な院生の方等延辺大学の方々はとても親切な方ばかりで、正直台湾留学先よりも様々な手厚いサポートを頂いた。今回安全に問題なく滞在できたのも、延辺大学だったからであると思う。

<プログラムに参加した感想>

プログラム参加にあたり、中国の外国語を学んでいる大学生のようす、中国語及び雰囲気

気を見ることが私の目的だった。実際延辺大学は朝鮮自治区延吉市に位置するため、朝鮮文化が思っていた以上に色濃く、私の想定する中国とはまた違った特徴を持つ土地だった。看板や標識が中国語と同じ大きさで韓国語併記なのはもちろん、学生の中にも、授業中メモは韓国語（実際には朝鮮語）で取っている子もおり、非常に興味深かった。

渡航期間中、「日本人だから」といって突っかかってこられたり、不快なことをされることはなかった。逆に台湾のように、特別喜ばれ優遇されたり人懐っこく声をかけられることもなかった。



月並みではあるがやはり日本でよく報道されている中国人というのは、一部でしかなくそれがすべてではないのだと改めて感じた。そもそも中国自体広すぎるため、その一部を一般化するのも早急であり危険だとも思った。

↑ 渡航中、第二次世界大戦終了記念日がかぶったため大学前に設置されていた。この日は一日中そこかしこで爆竹が鳴り響き、戦争も関係してくるためもしかしたら…と懸念していたが、危険な目にあうことはなかった。

<自分の目標の達成度や努力した経緯など>

私の目標は「台湾留学で学び得た中国語を生かして、現地の学生に日本語を教える」ことであった。中国語は話者が多い分、それぞれの土地によって話し方が大きく異なるのは私も中国語を学ぶ者として、もちろん分かって居た。しかしそれは傍から見て言えることであり、「共通語で言ったつもりが、表現方法が違うために伝わらない」ことを実際に自身で体験するとなかなか衝撃的であった。当時はそれなりにショックを受け、その後の授業でも「間違ったこと（伝わらないこと）は言いたくない」とだんだん神経質になっていった。が、今このように振り返ってみると、これは日本で言う「自分が使っていた共通語だと思っていた言葉が、実は方言だった」と似たような体験であったのだろうと思う。ある意味貴重な体験ができたのかもしれない。また授業に関して言えば、そもそも私自身に教えるテクニックや経験が無いため、当たり前だが初めはプロの日本語教師のように段取りよく上手いかなかった。回数を重ねるごとに、生徒が反応をしてくれるような内容を濃くしていくことはできたと思う。

<今後の展望>

今回中国に訪問する機会を頂き、自分の中華文化への認識をさらに奥深いものにできたのではないと思う。現地生活は、「台湾留学で何とかなったから、同じ中華圏だし何とか

なるだろう」という考えで行ってしまったため、運悪く帰国三日前に寮が断水し 2-3 日お風呂に入れない思わぬトラブルを体験してしまった。違う国、違う土地に行くのだから勝手が違うのは当然であり、事前に調べられる現地情報は調べておく方がやはり懸命だなど思いなおした。次にこのような短期間の渡航に参加したり旅行したりする場合は、十分確認するよう肝に銘じておく。延辺大学生との交流で得た経験は、今後の山形大学でのチューター活動及び中国からの留学生の子たちと交流する際に活用していきたい。その上で台湾の中国語だけではなく中国の中国語も、今後しっかり学習を継続していきたい。



←大学前のレストランやスーパーがたくさん入るビル。
夜はとても賑やか。

延吉空港→
こちらにも韓国語と中国語
両方が書かれている。

